

保育者を目指す学生の資質と力量に関する実習教育の検討① ～実習における事後アンケートの振り返りから～

居原田洋子・奥 典之・岡本 美幸

美作大学・美作大学短期大学部紀要（通巻第63号抜刷）

論文

保育者を目指す学生の資質と力量に関する実習教育の検討① ～実習における事後アンケートの振り返りから～

Examination of Practical Education with Regard to the Qualities and
Competences of Students Aiming to Be Nursery School Teachers
～ The Analysis of the Questionnaire after Practical Training ～

居原田洋子[†]・奥 典之・岡本 美幸

要 旨

本研究では、保育者を目指す学生の保育者を志す意識や資質と力量の向上を図るための実習指導の在り方を検討するにあたり、幼稚園教育実習や施設実習、保育所実習の三実習に臨む学生の実習事後調査より学生の実習の状況や意識を検討し、三実習指導教員のより効果的な指導の在り方について、手掛かりを探ることを試みた。三実習の中で施設実習は特殊であったが、4回の実習を重ねることで、実習に向かう姿勢や実習への取り組み方は、それまでの実習や講義を還流する課程を生かし向上されていた。実習教育での三実習の「協働」の取り組みこそが、保育者の理論と実践の融合という面からも重要かつ急務である。

キーワード：保育者養成 三実習 協働 資質 力量 理論と実践 質問紙調査

1. はじめに

社会がめまぐるしく変化する中で、乳幼児教育機関を取り巻く環境も大きく変化し、これからの社会を子どもたちが主体的に生きていくために必要な力を育む必要性がこれまで以上に高まっている。その背景から、幼稚園教育要領、保育所保育指針、ならびに幼保連携型認定こども園教育・保育要領の3法令が2017年に同時改定され、幼児の育みたい資質・能力の育成をめざし、2018年度からの施行が予定されている。そのために、乳幼児教育機関における保育者は、教育・保育の質の向上を目指す必要性も更に強調されるようになってきた。

保育者養成機関においても、保育者として着任後すぐに現場で活躍できるような、質の高い保育者をいかに養成するかが強く求められる時代になっている。単に教育して世に送り出すだけではなく、世に出した卒業生が、保育者としてふさわしい人格と専門的知識や

力量を備えて現場で活躍し、離職することなく、職場の同僚や保護者、専門家と協働しながら、更に保育者としての専門性向上を行っていくような、高い意識を持った学生を育てることが、養成校の義務とされている。保育者として着任後にすぐに現場の実践力になる資質と力量を高めたところだが、保育者養成校の学生の資質低下には様々な課題もある。中平・馬場・高橋（2013）は、目的意識の不明確なまま保育士養成校に進学した結果、保育に対する意欲がなく、保育実習においても単なる単位修得のためという姿勢で臨む学生や、生活態度等に問題のある学生、日常の言葉遣いや挨拶などの社会的マナーの欠如した学生、人間関係構築力が弱い学生など、保育者としての基本的資質に欠ける学生も存在しているという。このような現状の中、保育者を目指して進学した学生を、卒業までの養成期間の中で、社会人としての豊かな教養と資格取得に備えるべく保育者としての資質と力量を、いかに身

に付けていくかが課題となっている。

その検討課題の一つに、実習があるといえる。保育者養成において実習は、講義などで学んだ理論や知識を実践し、その理論や知識を学生自身の子ども観や保育観と結び付けて統合的に体得することができる教科である（金子, 2009）。それゆえに実習は保育者養成にとって必修とされている重要な科目であり、保育者養成の集大成の科目である。実習の経験を重ねることで、学生は保育者になるために、意識やイメージ、態度に大きな影響を与え、より保育者としての資質と力量の向上を図ることができると考えられる。そのために、学生やその時代の動向に合った教育環境やカリキュラムの検討も求められている。

近年、幼稚園教諭免許と保育士資格の両方の資格が取得できるカリキュラムが編成されている養成校が増えている。両方の資格取得を目指す短期大学生は、2年間の短い養成期間に、4から5回の実習を行い、息つく暇なく就職していくことになる。保育士資格取得においては、保育所保育士を志望する学生も、養成課程の実習では、保育所と施設の両方を実習することが必須とされている。また、保育者を目指す学生の中には、幼保連携型認定こども園のように、幼稚園教諭免許と保育士資格の併有資格で保育教諭として就職する学生も増加している。その他、憧れの保育者を目指し純粋な気持ちで入学してくる学生の中には、実習での出会いや経験から、その後の進路を変え、卒業後の方向性を考える機会にもなり、例えば、幼稚園教諭を目指していた学生が、卒業後には社会福祉施設職員として就職する場合もある。養成校卒業後の道を広く検討できるよう、両資格を取得し卒業することが重要になっている。そのために保育者を目指す学生は、併有資格を目指し、幼稚園と保育所、施設の3つの実習に臨むことになる（以下、幼稚園教育実習と保育所実習、施設実習を合わせて、「三実習」と呼ぶ）。

II. 本学の三実習の現状

本学では、2年間の養成課程の中で、1年次の2月に保育実習Ⅰ（保育所）を10日間行い、2年次の6月

に幼稚園教育実習を4週間、8月中旬から9月下旬にかけて施設実習Ⅰ（施設）を10日間11月に保育実習Ⅱを10日間の4回の実習を行っている。それに加え、表1に示したように、本実習前には、観察実習や参加実習、ボランティア等を行い、実習後にも次の実習や卒業後の就職に向けたボランティア等も行っており、現場でのボランティアなどの経験を生かし、より実践力を磨く取り組みも行っている。

保育実習Ⅰ（施設）では、保育所以外の居住型の社会福祉施設にて実習を行っている。学生が希望する施設で実習を行うのではなく、割り振られた実習先で行っている。実習する施設は、多様であり、利用者の対象の年齢層も幅広く、ほとんどの学生は、施設への知識は浅く、漠然とした思いのまま実習に臨んでいる現状である。

保育所や幼稚園での実習は、中・高生の頃から実習やボランティア等で幼児教育機関に出向き、子どもと関わるなどの経験から、施設よりも知識やイメージが高い。実習先は、地元の保育所や幼稚園で実習を行っている現状である。また、保育実習Ⅰ（保育所）と保育実習Ⅱの実習園は、ほとんどの学生が同じ園で実習を行っている。

必修課程として位置づけられている実習には、それぞれに事前・事後指導が施される。実習指導は、1年次前期に三実習の基礎として全15回の実習指導を行う。そして、1年次後期からは、三実習に向けてのそれぞれの実習事前・事後指導が並行して行われる。混同する学生や個別の配慮の必要な学生もあり、個別での指導も行っている。三実習それぞれの専門性に関わる内容は特殊な所も多く、学生はそれを整理し理解しながら実習準備または事後の振り返りを行っている。こうした本学の二年間の保育者養成課程は、講義・演習・実習の還流する課程の中で、保育者としての子ども観や福祉観、幼児教育観等を学生自身が身に付けながら、保育者としての実践を担っていくための十分な資質と力量の基礎を習得できるように計画し行っている。

表 1. 2 年間の各実習機関での実習やボランティアについて

年 次	期 間	実 習 日 数	実 習 およびボランティア
1 年 次	夏 季 休 業	6 日	保 育 所 観 察・参 加 実 習 を 兼 ね た ボ ラ ン テ ィ ア
	9 月	1 日	施 設 観 察・参 加 実 習
	10 月	2 日	幼 稚 園 観 察 実 習
	冬 季 休 業	数 日	保 育 所 実 習 先 ボ ラ ン テ ィ ア
	2 月	10 日	保 育 実 習 I (保 育 所)
	春 期 休 業	数 日	就 職 に 向 け た ボ ラ ン テ ィ ア
2 年 次	5 月	1 日	幼 稚 園 参 加 実 習
	6 月	4 週 間	幼 稚 園 教 育 実 習 (4 週 間)
	8 月 ～ 9 月	10 日	保 育 実 習 I (施 設) (10 日 間)
	夏 季 休 業	数 日	保 育 所 実 習 先 ボ ラ ン テ ィ ア
		数 日	就 職 に 向 け た ボ ラ ン テ ィ ア
	11 月	10 日	保 育 実 習 II
	冬 季 休 業	数 日	就 職 に 向 け た ボ ラ ン テ ィ ア
	2 月 ～	数 日	就 職 に 向 け た ボ ラ ン テ ィ ア ま た は 研 修

Ⅲ. 研究の目的

本研究は、上述したような状況を踏まえ、保育者養成校 2 年間で、保育者を目指す学生の資質と力量の向上を図るための、三実習指導担当教員のより効果的な実習指導の方法を模索することを目的とし、三実習に臨む学生の実習事前、実習中、実習事後の認識を検討し、その手掛かりを探ることを試みる。

Ⅳ. 研究方法

調査対象者は、T市私立M大学短期大学部幼児教育学科2015年入学の2年生で実習履修者であった61名を対象とした。

履修者は、保育実習Ⅰ（保育所）履修者61名、幼稚園教育実習履修者53名、保育実習Ⅰ（施設）履修者59名、保育実習Ⅱ履修者59名である。

調査実施時期は、保育実習Ⅰ（保育所）と、幼稚園教育実習、保育実習Ⅰ（施設）、保育実習Ⅱの、養成課程における実習回数4回の全てが終了後の2016年11月に、実習事後指導の講義の時間内において行った。

調査方法は、無記名方式の質問紙調査である。学生には、後述する質問紙を配布後に、記入の際の留意点や、今後実習指導の見直しを行うための調査である旨を伝え、回答結果は個人が特定されないこと、答えたくない質問には答えなくても良いこと、実習の評価対

象等には不利益にならないこと等、口頭にて教示し、一斉に記入を依頼した。回答は本人の学生の自由意思によるものとした。記入に要した時間は10分から15分程度であり、全員が記入終了後に、配布した質問紙を全て回収した。回収部数については表2に示した通りである。回収をもって同意を得たものとした。

Ⅴ. 結 果

三実習の各結果については、回答の割合は前述した表2に示した通りである。なお、図の表記については、保育実習Ⅰ（保育所）を「保育Ⅰ」、幼稚園教育実習を「幼稚園」、保育実習Ⅰ（施設）を「施設」、保育実習Ⅱを

表 2. 質問紙の配布数、回収数、および回収率

実 習 の 種 類	実 習 参 加 人 数 及 び 配 布 数 (名)	回 収 数 (部)	回 答 率 (%)
保 育 実 習 Ⅰ (保 育 所)	61	53	86.9%
幼 稚 園 教 育 実 習	53	49	92.4%
保 育 実 習 Ⅰ (施 設)	59	52	88.1%
保 育 実 習 Ⅱ	59	54	91.5%

表3. 実習事前の状況について（アンケート結果）

問	質問項目	区分	N	5+4	5	4	3	2	1
1	あなたは自分の課題や目標をきちんと持って実習に臨みましたか	保育Ⅰ	53	50.9%	17.0%	34.0%	39.6%	9.4%	0.0%
		幼稚園	49	75.5%	38.8%	36.7%	22.4%	2.0%	0.0%
		施設	52	59.6%	25.0%	34.6%	38.5%	1.9%	0.0%
		保育Ⅱ	54	85.2%	44.4%	40.7%	14.8%	0.0%	0.0%
		平均値		67.8%	31.3%	36.5%	28.8%	3.3%	0.0%
2	実習前、実習に向けて自分の取り組み姿勢は積極的でしたか	保育Ⅰ	53	54.7%	15.1%	39.6%	30.2%	13.2%	1.9%
		幼稚園	49	65.3%	38.8%	26.5%	30.6%	4.1%	0.0%
		施設	52	46.2%	9.6%	36.5%	32.7%	17.3%	3.8%
		保育Ⅱ	54	79.6%	33.3%	46.3%	18.5%	1.9%	0.0%
		平均値		61.5%	24.2%	37.2%	28.0%	9.1%	1.4%
3	幼稚園や保育所の園児や施設利用者を理解するためによく事前学習をしましたか	保育Ⅰ	53	50.9%	17.0%	34.0%	35.8%	13.2%	0.0%
		幼稚園	49	59.2%	18.4%	40.8%	34.7%	6.1%	0.0%
		施設	52	57.7%	17.3%	40.4%	34.6%	7.7%	0.0%
		保育Ⅱ	54	79.6%	24.1%	55.6%	18.5%	1.9%	0.0%
		平均値		61.9%	19.2%	42.7%	30.9%	7.2%	0.0%
7	実習以前から、幼稚園や保育所の園児や施設利用者に対し、良いイメージを抱いていましたか	保育Ⅰ	53	88.7%	79.2%	9.4%	9.4%	1.9%	0.0%
		幼稚園	49	93.9%	75.5%	18.4%	4.1%	2.0%	0.0%
		施設	51	43.1%	25.5%	17.6%	35.3%	15.7%	5.9%
		保育Ⅱ	54	90.7%	77.8%	13.0%	7.4%	1.9%	0.0%
		平均値		79.1%	64.5%	14.6%	14.1%	5.4%	1.5%
19	実習以前から、幼稚園、施設、保育所へのイメージは良いイメージでしたか	保育Ⅰ	53	84.9%	56.6%	28.3%	9.4%	3.8%	1.9%
		幼稚園	48	83.3%	52.1%	31.3%	12.5%	4.2%	0.0%
		施設	53	52.8%	22.6%	30.2%	28.3%	17.0%	1.9%
		保育Ⅱ	54	87.0%	63.0%	24.1%	7.4%	5.6%	0.0%
		平均値		77.0%	48.6%	28.5%	14.4%	7.6%	0.9%

「保育Ⅱ」と記す。

1. 実習事前の状況について

実習事前に、実習に対する自己課題や目標を持ち、実習に臨むことができたかについて、表3に示した。5件法で4以上の割合をみると、施設実習（59.6%）を除き、2年間の実習経験が増す毎に自己課題や目標設定を行う意識が高まっていたようであった。

実習に向けた事前準備について、表3で示した。自己課題同様、実習準備を行う姿勢は、実習経験が増す毎に高まっているが、施設実習（46.1%）については、実習形態が異なるためか、事前準備は積極的ではないようである。しかし、事前学習については、保育Ⅰが51.0%、幼稚園59.2%、施設57.7%、保育Ⅱ79.7%と、事前学習は、実習を経験するに度に増加していた。

実習事前の実習機関や子どもまたは利用者に対する印象について、表3に示した。幼稚園や保育所の実習機関や園児に対しては、約9割の学生がよい印象を抱いているようである。しかし、施設実習においては、幼稚園や保育所とは異なり、実習事前には施設や施設利用者に対するイメージが十分でないようであった。

2. 実習中の状況について

実習園での子どもや利用者の姿や実習園をどう捉えたかや、実習中に子どもや利用者、職員との関わりについて、表4に示した。

三実習ともに、約8割以上の割合で、実習機関の人的・物的環境も良く、実習園の子どもや利用者は、生き生きと過ごしていると、捉えていた。

実習園の実習生の受け入れ態勢については、三実習を比較すると、幼稚園や保育所での実習では8割以上が態勢を十分と感じており、施設実習（73.1%）は、他の二実習よりやや低かった。

実習での子どもや利用者との関わりについては、幼稚園（91.8%）と高く、次いで保育Ⅱ（87.0%）、保育Ⅰ（83.0%）、施設（71.2%）の順であった。

実習園での人間関係については、三実習共に約8割以上の学生が、子どもや利用者とは良好な関係であった。職員との関係は、子どもや利用者と比較するとやや割合が低い。特に施設（63.5%）は、他の二実習と異なっていた。

実習園で実習を経験できたことに対しては、三実習

表4. 実習中の状況について（アンケート結果）

問	質問項目	区分	N	5+4	5	4	3	2	1
4	園児や施設利用者は生き生きとしていましたか	保育Ⅰ	53	94.3%	77.4%	17.0%	3.8%	0.0%	1.9%
		幼稚園	49	89.8%	77.6%	12.2%	10.2%	0.0%	0.0%
		施設	52	80.8%	59.6%	21.2%	15.4%	3.8%	0.0%
		保育Ⅱ	54	98.1%	79.6%	18.5%	1.9%	0.0%	0.0%
		平均値		90.8%	73.5%	17.2%	7.8%	1.0%	0.5%
5	幼稚園、施設、保育者は、施設的环境は良かったですか	保育Ⅰ	53	81.1%	60.4%	20.8%	15.1%	3.8%	0.0%
		幼稚園	49	89.8%	63.3%	26.5%	8.2%	2.0%	0.0%
		施設	52	78.8%	50.0%	28.8%	15.4%	5.8%	0.0%
		保育Ⅱ	54	88.9%	59.3%	29.6%	9.3%	1.9%	0.0%
		平均値		84.7%	58.2%	26.4%	12.0%	3.4%	0.0%
9	幼稚園、施設、保育所での実習の受け入れ準備はできていましたか	保育Ⅰ	53	83.0%	50.9%	32.1%	9.4%	7.5%	0.0%
		幼稚園	48	85.4%	52.1%	33.3%	12.5%	0.0%	2.1%
		施設	52	73.1%	42.3%	30.8%	19.2%	3.8%	3.8%
		保育Ⅱ	54	88.9%	55.6%	33.3%	5.6%	5.6%	0.0%
		平均値		82.6%	50.2%	32.4%	11.7%	4.2%	1.5%
14	子どもや利用者に積極的に関わることができましたか	保育Ⅰ	53	83.0%	47.2%	35.8%	15.1%	0.0%	1.9%
		幼稚園	49	91.8%	65.3%	26.5%	6.1%	2.0%	0.0%
		施設	52	71.2%	34.6%	36.5%	21.2%	7.7%	0.0%
		保育Ⅱ	54	87.0%	74.1%	13.0%	11.1%	1.9%	0.0%
		平均値		83.3%	55.3%	28.0%	13.4%	2.9%	0.5%
6	あなたと子どもや利用者との人間関係は良好だったと思いますか	保育Ⅰ	53	81.1%	43.4%	37.7%	11.3%	5.7%	1.9%
		幼稚園	49	87.8%	53.1%	34.7%	10.2%	0.0%	2.0%
		施設	52	76.9%	36.5%	40.4%	15.4%	5.8%	1.9%
		保育Ⅱ	54	88.9%	48.1%	40.7%	9.3%	1.9%	0.0%
		平均値		83.7%	45.3%	38.4%	11.5%	3.3%	1.5%
12	あなたと担当職員・保育者との人間関係は良好だったと思いますか	保育Ⅰ	53	73.6%	45.3%	28.3%	20.8%	1.9%	3.8%
		幼稚園	49	85.7%	55.1%	30.6%	8.2%	2.0%	4.1%
		施設	52	63.5%	32.7%	30.8%	28.8%	3.8%	3.8%
		保育Ⅱ	53	81.1%	58.5%	22.6%	15.1%	1.9%	1.9%
		平均値		76.0%	47.9%	28.1%	18.2%	2.4%	3.4%
17	実習園や施設、保育所で実習できたことをよかったと思いましたか	保育Ⅰ	53	86.8%	67.9%	18.9%	7.5%	1.9%	3.8%
		幼稚園	48	91.7%	72.9%	18.8%	4.2%	0.0%	4.2%
		施設	52	88.5%	61.5%	26.9%	7.7%	0.0%	3.8%
		保育Ⅱ	54	96.3%	72.2%	24.1%	1.9%	0.0%	1.9%
		平均値		90.8%	68.7%	22.2%	5.3%	0.5%	3.4%

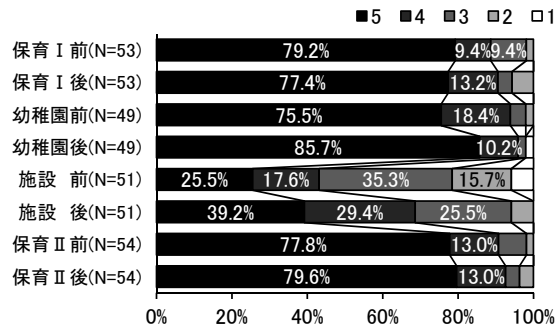


図1. 子どもや利用者に対して、良いイメージを抱いているか

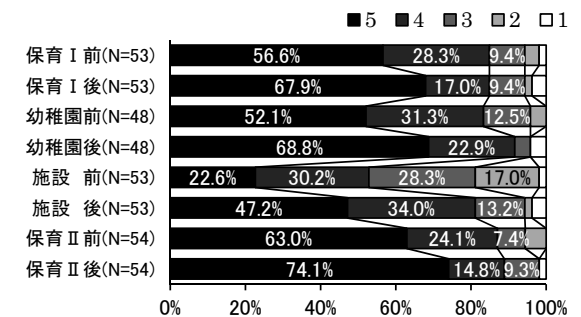


図2. 実習機関に対して良いイメージを抱いているか

共に高く、特に施設はその他の質問項目では、他の二実習よりも低く捉えているが、実習を経験できたことに対しては、約9割が良かったと捉えていた。

実習事前・事後の、実習機関と子どもや利用者の印象について図1、図2に示した。5（とても当てはまる）の回答割合をみると、初めての实習である保育Ⅰ

では実習前後を比較すると、実習事後の方が下がっていた。5件法の4と5を含めた割合でみると、三実習共に高くなっている。特に施設では、実習前後の差が大きかった。

表 5. 実習の振り返りについて（アンケート結果）

問	質問項目	区分	N	5+4	5	4	3	2	1
10	日誌の内容や書き方をよく指導してもらえましたか	保育 I	53	84.9%	54.7%	30.2%	13.2%	1.9%	0.0%
		幼稚園	49	91.8%	75.5%	16.3%	4.1%	2.0%	2.0%
		施設	52	59.6%	21.2%	38.5%	25.0%	7.7%	7.7%
		保育 II	54	90.7%	63.0%	27.8%	9.3%	0.0%	0.0%
		平均値		81.8%	53.6%	28.2%	12.9%	2.9%	2.4%
11	実習中には、個別に指導や助言がありましたか	保育 I	53	84.9%	62.3%	22.6%	11.3%	3.8%	0.0%
		幼稚園	49	91.8%	71.4%	20.4%	6.1%	2.0%	0.0%
		施設	52	73.1%	42.3%	30.8%	13.5%	5.8%	7.7%
		保育 II	54	94.4%	70.4%	24.1%	3.7%	1.9%	0.0%
		平均値		86.1%	61.6%	24.5%	8.7%	3.4%	1.9%
13	自分の自己課題に関して指導してもらえましたか	保育 I	53	60.4%	37.7%	22.6%	34.0%	3.8%	1.9%
		幼稚園	49	63.3%	34.7%	28.6%	28.6%	6.1%	2.0%
		施設	52	65.4%	30.8%	34.6%	21.2%	9.6%	3.8%
		保育 II	54	61.1%	40.7%	20.4%	33.3%	5.6%	0.0%
		平均値		62.5%	36.0%	26.5%	29.3%	6.3%	1.9%
15	事務的な仕事や日誌などの記録が迅速かつ的確に処理できましたか	保育 I	53	66.0%	28.3%	37.7%	20.8%	13.2%	0.0%
		幼稚園	49	63.3%	26.5%	38.8%	26.5%	8.2%	0.0%
		施設	52	69.2%	32.7%	36.5%	21.2%	9.6%	0.0%
		保育 II	54	77.8%	44.4%	33.3%	14.8%	7.4%	0.0%
		平均値		69.6%	33.0%	36.6%	20.8%	9.6%	0.0%
16	あなたの実習内容に対して、いつも肯定的評価をうけましたか	保育 I	53	60.4%	24.5%	35.8%	28.3%	7.5%	3.8%
		幼稚園	49	71.4%	26.5%	44.9%	24.5%	2.0%	2.0%
		施設	52	55.8%	13.5%	42.3%	34.6%	5.8%	3.8%
		保育 II	54	68.5%	29.6%	38.9%	25.9%	3.7%	1.9%
		平均値		64.0%	23.5%	40.5%	28.3%	4.8%	2.9%
18	実習を終えて、幼稚園、施設、保育所に対する理解はできましたか	保育 I	53	90.6%	60.4%	30.2%	5.7%	3.8%	0.0%
		幼稚園	49	93.9%	61.2%	32.7%	2.0%	4.1%	0.0%
		施設	52	90.4%	61.5%	28.8%	3.8%	3.8%	1.9%
		保育 II	54	94.4%	68.5%	25.9%	3.7%	1.9%	0.0%
		平均値		92.3%	62.9%	29.4%	3.8%	3.4%	0.5%

3. 実習の振り返りの状況について

実習園での指導の状況や、学生の実習態度について表 5 に示した。幼稚園や保育所では、実習生に日誌や指導案、保育の方法などの指導や助言が、十分だったと 8 割以上が感じていた。施設実習は他の二実習よりも低く、個別の指導や日誌に関しては、指導・助言の意識が低いようであった。施設は、幼稚園や保育所での実習のように日誌や指導案に対する意識も異なっているようであった。

実習を終えて、実習機関への就職志望について図 3 に示した。5（とても当てはまる）の回答割合について三実習を比較すると、最後の実習である保育 II（55.6%）がより高く、幼稚園（36.7%）や施設（32.7%）よりも保育所を志望しているようであった。5 と 4 を含めた回答割合では、保育 II（72.3%）や幼稚園（71.4%）が高く、施設は、53.9%と低かった。

以上の結果より、各実習についての結果から三実習

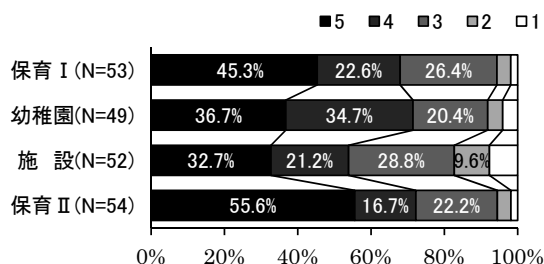


図 3. 実習を終えて、実習機関で働きたいと思うようになりましたか

についてそれぞれに分析すると、幼稚園教育実習については、前述の通り、保育所実習 I の経験を生かした実習となる。実習に対する自己課題や目標をもち、実習準備を行う姿勢も高く、積極的に取り組みができていたといえる。また実習園に対する印象もよく、人間関係も良好であると感じていた。特に積極的に子どもと関わったことや、個別に指導や助言を受けたと感じており、実習後の幼稚園への就労の思いも強い。ただ

し、日誌などの記録は迅速かつ的確に処理することについては苦労したようであった。

施設実習については、前述したように、施設は多様であり、対象の年齢層も幅広く、ほとんどの学生は施設への知識は浅く、漠然とした思いのまま実習に臨んでいるのが現状であるという事が今回のアンケート結果のなかにも表れていた。しかし、実習事後に関する質問項目の結果をみると、施設実習についても他の実習に近い形で、学生自身にとっては肯定的な評価をしており、特に実習事前に抱いていた否定的なイメージについては改善されたと感じていたようであるが、まだその分野に進みたいとまでには思い至っていないようであった。

保育所での実習は、前述の通り2年間の実習の最初と最後に経験する。初めて臨む保育実習Ⅰでは、実習事前の取り組みも十分でなく、実習準備や自己課題、実習中も子どもや保育者との関わりや積極性、迅速かつ的確に行う力など十分でなかったようであった。また、保育所や子どもに対するイメージも、実習事後で否定的なイメージがやや増したようであった。

保育実習Ⅱでは、三実習における最後の実習であり、保育所実習Ⅰでの経験や他の二実習の経験を生かした実習で、実習前から実習に対する自己課題を持ち、実習中は積極的に子どもと関わられたようであった。日誌などの記録も迅速かつ的確に行える力を身に付けることができたようであった。また、2年間の三実習での実習を振り返り、保育所で働きたいという意識が高まったようであった。

VI. 考 察

1. 幼稚園教育実習について

実習における教材研究や指導案等の事前準備については、学生に関わる養成校の全ての教員の指導の結果となる。今回の調査では、事前準備の意識は高い数値を示しているが、現実には、方法がわからず取りかかれない学生もいる。大半の学生が、情報を与えてもらうことに慣れ、自ら遂行する力が弱いことが目下の課題である。学ぶプロセスも自ら構築でき、目標達

成に向けて創造的に遂行力を持つ学生を育てていきたい。

実習園については、学生の受け入れの準備、良好な人間関係等、学生が肯定的な高い評価を得ているが、以前の学生に比べ、実習園が今どきの学生理解に務めている結果を現わしていると考えられる。そして、学生のよいイメージの高さは、実習園の指導教諭が学生個々に合わせて配慮がなされていると伺える。

また、幼稚園の場合は、1園当たりの教員数が比較的少ないので、これまでの教員間の連携を深め、効果的に連携し仕事を分担するなど組織的・協同的に諸課題に取り組む醸成が求められている。子どもと積極的に関われたことに終わるのではなく、将来学生が、近年の幼稚園が多様化かつ複雑化する中で、寄せられる期待やニーズに応えられ、このチームの一員に入れるような力も求められる資質といえる。

日誌や指導案などの記録を残し考察する実習経験が、実習後の大学での各授業につながっていることも考慮に入れ、幼稚園教育・保育の現場で、振り返ることは、次への課題をとらえ、援助の手立てを考える視点が明確になることを伝え、「記録に残す」重要な意義を指導し、記録から見えてくるものを今後も探っていきたい。

2. 施設実習について

土谷（2007）は、保育実習に関する意欲と現状についての研究として、学生へのアンケートを実施して年度毎の学生の意欲を比較研究している。これらの研究のなかで、特に施設実習について、事前のイメージをもっといいものに変えていく必要があり、そのためには事前学習を学生自らが積極的にできる工夫をする事が重要であると述べている。

今回のアンケート結果で表された実習前の課題についても、いかに学生の事前の知識を望ましいものに変化させていくか、それらを学生の主体的な学習のなかで行っていく必要がある。また、実習後に変化した施設についての知識を今後の学生自身の力として定着させる事が出来るか、理論と実践の融合という事につい

て、事後学習のより一層の充実が必要であると考え。

3. 保育所実習について

本学の初めての实習が保育実習Ⅰ（保育所）であるが、その実習に対し、今までのボランティアなどの経験や自身の卒園した保育園での思い出などから、比較的身近に感じることができるが、本実習となると今までの立場とは異なり、緊張や不安を抱きながら事前準備の行い方も漠然として臨んでいるようであった。そのため、実習に対する自己課題や目標の設定も、課題と実践に相違のある学生も存在するようだ。実習経験は、子どもや保育者との関わりや積極性、迅速かつ的確に行うなどの力は十分に行うことができなかったため、保育所や子どもに対するイメージが、実習事後に低下していた。

今回の結果から保育実習Ⅰ（保育所）は、保育者としての資質と力量が未発達・未整理な状態である。そのフォローアップのできる事後指導の在り方や、次に臨む幼稚園教育実習への意識の向かい方について、保育実習事後指導や幼稚園教育実習指導教員との連携の在り方を検討する必要があるようだ。

保育実習Ⅱに至る段階では、今回の結果から、養成課程で修得した知識や技術を総集し、それまでの実習などの経験を十分に生かすことで、学生は多少のゆとりをもって実習に臨めたようであった。また、養成課程の中で子ども観・保育観を熟達し臨むことで、自己課題を捉えながら積極的に実習を行うことができていただろう。また、2年間を振り返り、自身の就職へ方向性も固まる実習であったのではないだろうか。しかし、学生の資質と力量の向上を図るために、保育実習Ⅱの事前に行う、学生の施設実習の経験がどのように生かされたかは明らかでない。また、学生の中には、三実習終了がゴールとなり、保育者としての資質と力量を向上する意識が低下する学生も存在する。学生の意識の在り方についても、三実習協働による働きかけが重要になるようだ。

4. 三実習を通して

今回の結果から、実習で得られた経験値の生かし方が十分ではなく、三実習ともに事後指導が次の実習に十分に生かされるものになっていたかを省察するところである。短大2年間の保育者養成課程においては、学ぶべきものが多すぎて、また、学生自身の生活経験の不足などにより消化不良の状態になっていることは否定できない。また、実習は大学の各教科で学んだ理論や知識を実践し、統合的に融合していくことが望ましいが、それらと実習を分断し捉え、独立的に考える学生も多く存在する。

これまでも、学生の理論と実践の融合に向け、様々な研究が行われているが（松山,2009；山崎,2013；小島,2013；林・森本・東村・高橋,2015他）、理論と実践を融合するためには、それに向かうプロセスが重要であり、保育者を目指す学生の理論と実践の融合のプロセスこそが、これからの時代に求められる保育者の資質や力量の一助になるのではないだろうか。前出の松山（2009）は、学生自身が葛藤も味わいながら経験し、その上で保育を考える機会を設けることと、保育実践を客観的に見直すこと、そして仲間や同志と保育を語り合うことが、学生の学びを持続させ、その持続の結果から学生の意識が変容するという。同様に三実習においても、一人ひとりの各学生が4回の実習を行っていく中で、講義などで学んだ理論や既有知識と実習経験で得られた実践力を融合するプロセスを行えるような、実習指導内容を工夫が重要となる。

各実習は、実習を経験する順序や実習事前準備期間、実習の特徴が異なるため三実習の効果を比較することは困難である。また、前述の通り、短大2年間の三実習のスケジュールは過密で多忙な現状である。その限られた養成時間の中で学生の理論と実践の融合を目指すために、三実習は独立したものではなく、連続性や一貫性を意識した三実習指導教員による取り組みが重要となる。そのために、実習指導教員が違いや専門性を認め合い責任転嫁にならないバトンの受け渡しのようなつながりが望ましい姿であるだろう。

VII. まとめ

保育者を目指す学生の保育者を志す意識や資質と力量の向上を図るための実習を検討するにあたり、近年では「協働」というキーワードが取りざたされる。今村・新内・肥塚（2010）は、大学・地域・行政の各方面が互いに協働という言葉を切り口に協働によるネットワークの構築を模索している。外部機関と協働するためには、まず学内で担当する三実習の指導教員の協働の在り方が、保育者を目指す学生の資質と力量の向上を図るためには重要になるだろう。しかし、そのような養成校教員の協働による実習指導のあり方の検討を行った研究はあまりなされていないようである。実習教育での三実習の「協働」の取り組みこそが、保育者の理論と実践の融合という面からも重要かつ急務なのではないか。なぜならば、三実習を行うのは当然ながら一人の学生であり、バランスの良い保育者になるためには、これら三実習のグランドデザインが整っていないければならず、そうになってこそ理論と実践の融合も可能になると考えるからである。

しかし、それらに大変な困難さを伴うことは、前述のそれぞれの実習の分析及び考察にみられた視点の違いや、基本的には今回のアンケート項目に関してのそれぞれの実習内容と合致するか否かにも表れている。

そこで、今回の研究における三実習の協働については、共通のテーマを設定して、それらに協働して取り組むということをその内容にしたいと考えるのである。共通のテーマに対して三実習が協働して取り組む、その過程を通して三実習の担当者がお互いにそれぞれの実習についての考え方の理解を深め、どう協働していくことができるかを検討していく、いわばこのテーマの相互の専門性の理解のためのツールとしての役割を担うのである。

今後は、三実習の協働により目指すテーマとは何か、三実習が共通して取り組むべきものとは何か、それらこそが現在の社会における子どもに関する諸問題の解決に際して有効な働きに資するものである必要があるが、このテーマを検討することが三実習の協働に向けての取り組みの次の段階として位置付けていくた

い。

引用文献

- 土谷由美子（2007）．保育実習に関する意欲と現状について．一学生のアンケートを中心に一．中国学園紀要, 6, 167-171.
- 土谷由美子（2008）．保育実習に関する意欲と現状についてII 一学生のアンケートを中心に一．中国学園紀要, 7, 1-6.
- 林悠子・森本美佐・東村知子・高橋千香子（2015）．保育者としての資質と保育実践能力に対する学生の意識について．奈良学園大学奈良文化女子短期大学紀要, 46, 91-99.
- 今村方子・新内和美・肥塚陽子（2010）．大学、地域、行政との「協働」による保育士養成のあり方についての考察．梅光学院大学子ども未来学研究, 5, 35-47.
- 一般社団法人保育教諭養成課程研究会（2017）．『平成28年度幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けてと調査研究一幼稚園教諭の資質能力の視点から養成課程の質保証を考える一』．
- 金子智栄子（2009）．保育者の力量形成に関する一考察．一保育課学生から現職保育者に至るまでの養成課題をめぐって一．文京学院大学人間学部研究紀要, 1, 93-110.
- 小島千恵子（2013）．実践力を身につけるための実習プログラムの構築．一学生の実習後の「保育者の資質と力量」についての振り返りの記述から一．名古屋柳城短期大学研究紀要, 35, 173-181.
- 松山由美子（2009）．保育者養成における「保育実践力」育成のためのカリキュラムの構成と評価（2）．一「理論と実践の融合」についての一考察一．四天王寺大学紀要, 48, 121-136.
- 中平絢子・馬場訓子・高橋敏之（2013）．保育所保育における保育士の資質の問題点と課題．岡山大学教師教育開発センター紀要, 3, 52-60.
- 小館静枝・西方栄・今村迪子（1977）．短大における「実習」の現状と課題．小田原女子短期大学研究紀要, 8, 75-95.

大條あこ（2016）．幼稚園教育実習における指導と学生の学び．－開始から6年目を迎えて－．桜美林大学桜美林論考.心理・教育学研究, 7, 45-57.

山崎高哉（2013）．理論と実践との融合をめざす教員養成．－大阪総合保育大学の挑戦を中心に－．大阪総合保育大学紀要, 8, 45-68.